

## 報



## 會

會 岳 山 本 日

77

月 六 年 三 十 和 昭

## 歐洲政局と山々

島 田 巽

「一つの國家、一つの民族、一人の指導者」のスローガンの下に獨逸合邦が成功をおさめるに到つたが、この兩國の間には以前からたつた「一つの山岳會」しか存在して居なかつたと云ふ點で獨逸山岳會はアンシュルスの先驅者としてナチスの勳章位ひ貰つてもよい位だ。

ドイツ國自身は今迄その最高峰を二九六四米のツグシュビツツエとし、しかもそれすらオーストリアとの國境に半々で持つて居たのが、合邦後急に三三九八米にその最高峰を飛び上らし、グロス・グロツクナールこそドイツの最高峰だと云ふことになった。これに次ぐグロス・グネデイガにしても、ツグシュビツツエより七百米も高い、それに美しいティロール一帯を大ドイツ國の名の下に包含してしまつたのだが、獨逸山岳會にして見れば、今迄通り、いづれにしる自分達の縄張りには變りなく、若し變りありとすれば、その名稱から奥の字が除かれてあの特徴のある名稱が減び、獨逸山岳會D A Vと改められたことであらう。時を同じくしてイタリア山岳會C A Iも四月以來(Centro Alpino Italiano)と改稱されたことと對照すると獨逸樞軸の偶々の一致に微笑を感じる。面白いことには山登りにもこのや

うな政治の動きを直接に反映するやうなことがあちらこちらで行はれる。合邦の直後オーストリアの登山家ハンネス・シュネーベルガーはナチスの突撃隊員二名を伴つて新しい最高峰グロス・グロツクナールの大きな十字架の建つて居る頂にナチス・ドイツの國旗を續して來たのである。「大ドイツの最高地點(ハーケンクロイツを」といふこの行爲は全くナチス・ドイツ人には喝采を、拍しうなことだが、何だかその喝采を期待してやつた芝居ツ氣を感じないで居られない。

しかしヨーロッパの一方ではまた芝居ツ氣抜きの悲壯な山歩きが行はれて居るとも云へる。それは佛西國境のビレネーの山々だ。フランコ軍が遂に大西洋から地中海へスペイン國土を二分したため、孤立無援に陥つたカタロニアから人民戦線軍の將卒は積雪なほ深い峠路をフランスへと逃げ延びるに到り、陰鬱な逃亡者の列が山路に續いたのである。フランス陸軍でもこの無斷越境者の群を傍觀するわけにも行かず國境監視隊はいつともは密輸業者の横行するこれらの峠に越境者監視の役目を行ふに忙しい。

ブレンネル峠も話題の中心となりヨーロッパの山々にも時代の嵐が覆ひかぶさつて居るやうな状態が想像出来る。

## 浅間山の爆發

を見る

岡田要之助

昨年六月浅間山湯之平に滞在中、偶々爆發に際會して噴煙を近くに望む機會を得ました。大して珍らしいことでもないかと思ひますが、又何

## 昭和十三年版『山日記』發行

六月中旬、十三年度版山日記が發行の運びとなりました。例年の通り會員に對し特別定價を以て御頒布致しますから、豫約申込を願ひます。

- 1、頒價一圓(定價一圓二〇錢)
- 2、送料本會負擔
- 3、申込期限六月末日

か御參考になることも有らばと存じ極く簡単に當時の模様を御報知申し上げます。爆發は六月七日前、私は四五日前より、湯之平下火山館(標高約二〇〇〇米、火口壁よりの距離約二軒)に泊つてゐて此の爆發に出會した次第であります。

前日の天候。殆んど終日雨、日暮れて雨收りしも、雲行猶ほ定らず。當日の状況。四時三十分眼覺めて窓より外を見るに空は大分明るい様

子、いつも着のみ着の儘ゴロ寝をしてゐること故、何の雜作もなくその儘床を離れて洗面に出やうと云ふ途端(四時三十五分頃)ドサリと云ふ物音を聞く、崖崩れでもあつたかと思ふ位の感じにて爆發性の印象を受けず。火山館主人「ソリヤやつた」と叫びつゝ戸外へ飛び出す。之を聞いて我等もさては之が火山の爆發かと始めて氣がつき、カメラをつかんで、早速後に續いて出る。と見る浅間の頂からは、稍紫色がかつた黒煙がモリモリとまくれ上る如くに空を指して直上する。見る見る中に天に柱して黒雲の如く、その間からはチカチカと紫電の閃く様が頗る物凄しい。煙の根本の邊よりは、石が盛に降つてゐるのが見えるが大體前掛山の頂あたりに落ちてゐる。火山館主の話によると、之が夜なら、まるで花火のやうに壯觀を極めると云ふ。上の方では、眞黒の煙の間に白く霧の如く幕の如く垂れ下つて來るのが見えるのは火山灰であらうか。

此の間にも引續いてドカリドカリと氣味の悪い音が響く。黒煙は後から後から盛り上る。眞黒の花椰菜を見る如く、綿羊の背を見る如く、成程その昔小藤文次郎先生の講義に出て來たのが之だつたな等と憶ひ出す。しきり無しに噴き出す煙は早くも空に擴つて、末は遠く南東の方に流れてゐる。この間に何枚か寫眞を撮してゐる中に、一寸風向が變つたらしく、此方に向けて煙が擴る様子

に、火山館主「うっかりすると石が来るかも知れぬ。ソラ逃げる」と駈け出す。此の聲を聞くと流石に怖しく、我等も後を追つて一目散に小屋に走り込む。この小屋も前回噴火の際、茶碗大の石が飛んできて屋根をプチ抜いたと云ふ話だから、愈々石をかぶる段になれば、小屋に逃げたところでどうすることが出来るかと云ふ當も無けれど、何がなし屋根の下の方が安全のやうな気がしないことも無く、兎も角も小屋の中に走り込む。

ただし噴火は案じた程の發展も無く、それきり石も降つて来ず煙もまかず、二十分程の後(爆發の初より約三十五分位)再び出て見た時は、煙の色は大部分白つぽくなつたが、相變らずモクモクと噴き出してゐる。氣温を測つて見ると攝氏四度、相當涼く身體がゾクゾクする。

もう大したことも無いと云ふので、小屋に戻つて朝食。その後一時間程して出て見た時は、山はいつもの姿にかへつて、頂上からは白い煙が噴き上つてゐるのが、思ひなしか、平常より稍多いかと思はれる位の所であつた。

## 御 願 ひ

會報に對する會員諸氏よりの忌憚なき御批評乃至は眞面目な御希望をお送り下さい。



## 一九三三年の攻撃(三)

—エヴェレスト—

“Camp Six”より

吉澤生

高所へ來るといふと、どうも決斷力は鈍りがちになるものである。雪の中から岩が出て居たので、最初はそれをいゝ足場と思ひ込んだが、次には直ぐ傾斜があり過ぎるから、その一方の側へ足場を刻んだ方がいゝとも思つた、と又考へが變つてどつち道足場になるとすれば、一つや二つのステップは儉約出来るに違ひなからう、などとも考へる様になつたりした。この馬鹿々々しい小さな一點にこだはつて解り切つた事、即ちそれを避けて行くと決まるまでには一、二分を必要としたであろう。大きな仕事の中に出て來たほんの小さな問題が、實際の價值に比して全體の上に如何に重要な位置を主張し得るかは、全く不思議な現象と云はなければならぬ。

雪を横切つてから私は再び後を振返つて見たが、エリックのついて來る様子はなかつたのでその儘獨りて前進を續けて行つた。

山登りの常識から云へば全く反對となるのであるが、岩板の上を横切る時氷斧を外側の手に持つて、其處にある割れ目や龜裂に當てがつて行くのが最も容易な、最も安全な方法であるといふ事を發見した、それは私にとつて三番目の足の役目となし、一日中非常に貴重な同伴者となつてゐた。

雪溪の向側の岩板は、所々、グズグズな粉雪に被はれてゐた、外側に傾いた棚の上に進んで立たふとするには之を蹴散らしたり、掻き落したりしなければならなかつた。

前進は確實ではあつたが、緩慢だつた。だん／＼と進んで行く、そして岩帯(その下を私は横切つてゐた)の上に、最後の絶頂を見上げた時に、此の日の最後の勇躍と希望の念が身中に湧き上つて來るのを覺えた。私の調子は良かった、エリックと別れた時よりも尙良かった、一瞬、私は成功のチャンスが、惠まれたかの様に思へたのである。

グレイト・クールワールの底は隠れて見えなかつたが支溝と之を前者と離してゐる胸壁は、その全貌を現はしてゐた。此の二つは風蔭にある結果として、昨日の雪風の爲め雪がベツトリと著いてゐる。私の希望は此のバットレスを見てすつかり打挫

かれて了つた、それは今までよりはすつと傾斜の急な岩壁となつて居た。どの棚にも雪が一杯に溜つてゐる、恁んな状態で一體登攀の望みがあるだろうか、それもアルプスでは恐らく可能であるかも知れない、然し二八〇〇〇呎の高所、而も登攀者は今その力の極點に立つてゐる。然らば支溝の方はどうか、譬へ胸壁のトラヴァースが出来得るとしても此の溝の中の雪の状態は如何、不安定な粉雪では確實な足場は出來ないであらうし、行動の自由も阻止されるに違ひない。それを避けて堅溝の一方の側の壁を登る事も考へられるが、之とても殆ど雪に被はれてゐる仕末なのである。

本能的に私は之に代るべきルートを求めた。此の長い煩はしい厄介なトラヴァースをやめて、直接第二段階の上の一點を目指し、其處から最後の絶頂を攻撃する、壁は海に臨む斷崖の如く頭上にのしかゝり、所々オーヴァーハングを爲し、どの手懸りにも、皺にも、割れ目にも、それ相當に雪が積つてゐた、壁には全然眼に見えぬ割れ目はなく、すつと上の胸壁、多分一九二四年にノルトンが達したと思はれる地點まで行つて初めてギヤツプがある、これなら怎うやら物になり相に思へた、が然し直登は兎も角不可能であつた。

見込みのあるのは唯一つしかないそれは支溝を攀じて岩帯さへ過ぎれば、後は難しい場所もなくなるのだら

うといふ觀察である。現に絶頂の側面も見えてゐて、そこには困難らしいものはなかつた。其の基部は小石に被はれた傾斜面で、高い所は色の淡い轉石のスロープとなつてゐる、それをやるのは唯エネルギーだけの問題であるのだ、勿論、エヴェレストは最後まで頑強な對敵である以上、其處にも何かしら驚くべき困難が隠されてゐるかも知れない、とは云ふものゝひと度岩帯を下にする事が出來、困難な而も危険な登攀から安全且つ容易な登攀へと變つてさへ了へば、それだけでも疲労に堪え、山頂に至る残りの六百呎を乗り越えるだけの勇氣は、充分振ひ起させる事が出来るであらう、と思つたのである。

黃帶の傾斜はグレイト・クールワールに近づく程急になつて來た、概して岩棚は黃帶と平行になつてゐたが、いつもさうとは限らず一、二碼後戻りをしてから又他にルートを求めた事もあつた、が然し登攀自らはさう大して難しいものではなかつた——傾斜した棚の上に足を移す場合、特に其の上にグズ／＼の雪がある場合確りした注意を拂へば足るのであつた。

間もなくグレイト・クールワールの底が眼に這入つて來た、それは淺いので急な下降は必要でなく三、四十呎の巾で雪が埋まり、下の岩帯で終つて居た。數百呎下に高さ不明の部分があり、その下はすつと廣くな

つてゐて小さな懸垂氷河に續き、最後にロンブク氷河まで急激に落ちてゐる、自分の立つてゐる地點から其處まで八千呎はある。

實に荒涼たる場所である、向側には、私と支溝との間に急峻な雪の胸壁が控え、其の上には、すつと岩のバンドが取圍んでゐて、頂上は尙其の上に蒼穹を切つて、がつかりする程遙かな高所に聳え立つてゐる。

私は急な岩角をぐるりと捲いてゐる棚に沿つてクルールに近づいて行つた、此の棚はその岩角までは快適に廣くなつてゐるが、それから先は、巾敷時にまでも狭くなつてゐる。従つてそのコーナーまでは難なく行く事が出来たが、裏へ廻るや否や蟹の横這ひの様に、山側に顔を向けてデリ／＼と進まなければならなかつた。上の岩は意地悪く出張つてゐるが、アルプスならば一秒にしろ遠巡する様な場所ではなかつた。

此の岩角を曲るには、たつた一歩で事済んだが多少尻込みした傾向はある。バランスは非常に難しかった、両腕をぐつと延ばして、私は確保の手懸りを求めた、此の手懸りは大して重要なものではなく、バランスだけ旨くとれば充分であつたのだ、それがなければどうも安心がなかつた。が何處にもない、どの皺も皆下向きになつてゐる、暫らくの間、慄ふして宛で礫に遭つた様になつてゐるが、心臓は早鐘の様に撃ち、肺は激しく酸素を要求した、

と私の心に閃いたものはヒョツとすると、今後に控えてゐるクルールの中へ眞逆様に顛落して——それこそ永遠の忘却の中へ無限に滑り落ちて行く光景であつたのである。

私は三、四碼後戻りをして宛で馬鹿の様にボカンとして了つた。トラヴァースは可能ではあるのだ、エリツクさへ居たならば、何も躊躇などする場所ではないのであるが、彼の居ない今の場合、全く手も足も出なかつた。

それでも私は又やつて見た。前と同じ様に両手を擴げた體勢になつたが、安全に岩角を曲るその一歩をやる勇氣がどうしても出て來なかつた。

之に代る唯一のものは二十呎許り下にある棚である、私は此際、譬へ二十呎でも高さを見失ふといふ事は好まなかつたが、他に手段は無き相である。

その棚と私の間の岩板は可なり凸凹したもので安心出来る足懸りはなかつたが皺や襞があつた。後は摩擦で行くのだ、まづ山を脊にして腰を下ろし、掌をついて棚を慎重にすり下がつて見た、フリクションは案外効果的だ、掌を使はずにズボンの腰部だけでも身體を支へるには充分であつた。下の棚には嫌な場所はない、廣くて、信頼するに足るものがある。外側に傾斜した三、四呎の積雪があつたが、難なく雪に埋つたクルールの底に降り立つ事が出来た。

た。

ウインもウエヂャーもノルトン（一九二四年）と同様、此のクルールの中に同じ様に緊つてゐない嫌な雪を見てゐるが、彼等が上の棚をトラヴァースして私よりも高い所で横切つてゐると思へない。附近の雪は、試みに氷斧で銜いて見てわかつたのであるが、風の爲め硬くなつて居り、ステップ、カッティングが又必要となつて來た。

一步毎に息切れがして立停る、足許の雪や向ひの岩が、宛でグル／＼と廻るやうだ、又一步、そして又一息雪は非常に硬いが此の邊の角度は充分五十度はある、十二、三回のステップでやつと之を横切る事が出来た。

さて次は胸壁のトラヴァースである、支溝の方へほど平行に行く爲めにはまづ最初に五十呎許りを殆ど眞直に登らなければならぬ。

壁は急で、雪はたゞ載つてゐるだけである、クルールの中の雪は風で硬くなつてゐるのに、こつち側の岩板上の雪が積つた儘になつてゐるといふのは實に不思議である。此處は雪さへ無かつたなら恐らくグレイト・クルールの東側の岩板よりも困難であるといふ事は云へないと思ふ、澤山の棚があり、全體の角度は可なり急になつてゐるがバランス・クライミングのみで充分ケリがつく。従つてその場合、支溝に達するのは大して難しい仕事ではない筈である、然し今は全然事情が違つ

てゐて傾いた棚の上には雪が深く積つて居り、而もその雪たるや性質が悪く粉の様に柔かくザラメの様にグズグズで足を一所に留めて置く事は出来ない。氷斧でそれを掘り返して見て直ちに勝負あつたと悟つたのである。

今までの登攀は困難といふよりも危険であつた。所が今度は困難であ

## カラコラム・ヒマラマの山岳高度表

黒田孝雄

一九三六—七年の十一月より三月にかけて行はれた英國地學協會主催によるカラコラム協議會は、協會が中心となり十年間の準備をもつて、印度測量部その他の専門家の協力によつて會合されただけに、その結果は多大の期待をもつて迎へられてゐたが、その簡単な報告が發表され、いろいろ有意義な教示を與へてゐる。この時採擇されたカラコラム山系の命名に關する提案は斷案ではないがその方面に於ける一の權威ある提案である。ともあれ、從來使用されてゐた歐洲風の稱呼をさけて、その地方の個有稱呼をなるべく採用しやうとしたことは特に注目すべき點で、多くの新しい稱呼が提出確定されてゐる。昨年度「山日記」外國高山百七十座の中からカラコラムに關する山岳を跋渉し、それを新しい稱呼に従つて書き直して見たのが、次の高度表である。この報告に従つて高度には呎を採用した。高度順に見れば呎の逆になつた所や、多少異なるものもあるが、これは「山日記」の資料とこの報告の資料とが喰ひ違つてゐるのによるので、こゝでは暫らく報告の高さをその儘に採用する事とした。山名に括弧を施してゐるものは舊稱呼であつて、今度適當な地方名がないもので、その意味で「無名峯」となつたものである。左端の番號は山日記の山岳番號を示す。短時日の間に調べたので間違ひも多いであらうが御許し願ひたい。尙この報告はG・J・一九三八年二月に載つてゐる。



最後に山日記になき二三〇〇〇呎以上の山峰で、新稱呼を確定されたものを参考までに左に記して置く。

|               |        |
|---------------|--------|
| Saser Kangri  | 25,170 |
| Chogolisa II  | 24,783 |
| Momhil Sar    | 24,090 |
| Sherpi Kangri | 23,960 |
| Makorum       | 23,750 |
| Singhi Kangri | 23,630 |
| Apsarasas I   | 23,770 |
| " II          | 23,750 |
| " III         | 23,740 |
| Yengniz He    | 23,056 |

|                      |        |
|----------------------|--------|
| 38 Saltoro Kangri II | 25,280 |
| 41 (Hunza Kunji II)  | 25,294 |
| 42 Chogolisa I       | 25,110 |
| 45 Skyang Kangri     | 24,750 |
| 48 Mamostang Kangri  | 24,690 |
| 49 (K24)             | 24,650 |
| 50 (K23)             | 24,590 |
| 52 Pumarikish        | 24,580 |
| 53 (Pyramid Peak)    | 24,500 |
| 54 Teram Kangri I    | 24,489 |
| 57 Sia Kangri        | 24,350 |
| 60 Haramosh          | 24,270 |
| 67 Baltoro Kangri    | 23,990 |
| 68 Muztagh Tower     | 23,860 |

|                     |        |
|---------------------|--------|
| 2 K 2               | 28,250 |
| 12 Gasherbrum I     | 26,470 |
| 13 Broad Peak       | 26,414 |
| 14 Gasherbrum II    | 26,360 |
| 16 Gasherbrum III   | 26,090 |
| 18 Gasherbrum IV    | 26,000 |
| 20 Disteghil Sar    | 25,868 |
| 25 Masherbrum E.    | 25,660 |
| 28 Masherbrum W.    | 25,610 |
| 29 Rakaposhi        | 25,550 |
| 30 Kanjut Sar       | 25,460 |
| 33 (Hunza Kunji I)  | 25,540 |
| 35 Saltoro Kangri I | 25,400 |

## 臺灣の山の報告



北大山岳部

岡彦一

南の國の高山には久しい間色々と憧憬を抱いてゐたのであつたが、この三月、遂に臺灣中央山脈の一部にささやかな足跡を、残して来る事が出来た。部員丸山君と二人、一ヶ月餘の旅は洵に恵まれた愉快な思ひ出となつた。繁雑な入蕃手續等も在臺先輩諸氏の御盡力により、簡単に済ませる事が出来、三月十六日、雪の札幌を發つ事になる。

### △コース

私達の取つた中央尖山、南湖大山縦走のコースは昭和十一年十二月臺灣山岳會員江藤英雄、小林武男外四氏によつて試みられてゐる。江藤氏は今度の事變に名譽の戦死を遂げられた。私達は氏等の足跡を辿り、残雪のこの尾根を歩いたのであつた。

### △日程

三月十六日 札幌發

二十日 郵船富士丸にて神戸出帆  
二十三日 キールン入港、直ちに臺北に行く、四日滞在、準備  
二十七日 臺北發、羅東營林署クラブのお世話になる。  
二十八日 晴後曇 羅東—タロコ峽—バタカン警察クラブ 蘇澳よりは有名な東海岸の斷崖、パスは四〇〇米位の高さを通る。窓の下遙かに海が見える。

二十九日 晴後曇 バタカン—タビト—タウサイ駐在所、タビトまでは謂ゆるタロコ峽の核心、スケールの大きさは類を見ない、タビトを過ぎると今までの峻しきはなく、飛驒の高原を思はせる様な所もある。タウサイまでの八里の道は強行で、蕃社に夕霧の棚引く頃、駐在所の長野氏の御宅に辿り着いた。

三十日 晴後ガス タウサイ—ムルドウン—ボツカン 獵小舎 タウサイ、ロードフ兩社より四名の蕃人を儲ひいよ／＼山に入る。蕃社の子供等に送られ、農耕地の中の急坂を登り切ると新緑の疎林になる。塔山の山腰が美しく輝いてゐるのが注意を惹く。

ヤンウライと言ふ水場にて晝食 ムルドウン 獵小舎を通り、タウサイ溪の上流ボツカンに着いたのは薄暗くなつてからであつた。

三十一日 晴一時ガス ボツカン—中央尖山南湖大山最低鞍部—中央尖山往復—ベータボツク水場キャンプ 小舎場の背後の草附を、ガスの中

を二時間程登ると稜線に出た。こゝにて二名をベータボツクに先行せしめ、若い二人を連れ中央尖山に向つた。頂上の下の鞍部に出るにはしばらく斷崖をトラバースするのであるが、ガスのため道を失ひ、鎌尾根になつた稜線を通つた。しかし雲海の上に暖かい日射に恵まれてゐる頂に、思ふ存分驚くべき展望を楽しむ事が出来た。残雪が僅かにあつた。

この日の行程は非常な強行で、輕度の高山病も加はり、ベータボツクの全くカンファアブルなキャンプ地を見出した時は、疲れ果てゐた。四月一日 快晴 ベータボツク—南湖主峰—ブナツケイ小舎 草附を斜に南湖南峰に登り、東側の森林中を捲いて、あこがれの、南湖大山に出た。今日も快晴で「聖なる稜線」のすばらしい景觀を終日眺めながら歩いた。主峰東側カールでスキーを楽しむ、又蕃人に練習させ、すつかり伸びて夕刻小舎に引き上げた。スキーは小舎に残して行く事とする。  
二日 快晴 ブナツケイ—キレフト—イービヤナン駐在所 縦にした三千米は如何に長い道程だつた事だらうしかし刻々變化する山々の姿は決して退屈を感じしめなかつた。冬に近い南湖大山を獲ち、ネコヤナギが芽を吹いてゐる新緑の林をひたすら降つてエキジニウ溪の谷底に出ると全く夏山の氣分だつた。次高は可成下の方まで眞白な頂を見せてゐた。  
三日 快晴 ビヤナン—鞍部—平岩

山駐在所 鞍部を境として全く風景が異なる。針葉樹の疎に生えた廣い明るい草原地は北海道を思はせる。

四日 快晴後曇 シカヨウ—松嶺—マレット駐在所。

五日 晴一時曇 マレットパーハツク—霧社—肩溪—浦里北大演習林事務所。

六日 埔里滞在、整理

七日 埔里—臺中—臺北

十日—十八日 南部—農業見學の爲旅行、ガランビまで行く

二十二日 キールン出帆 商船高千穂丸

二十五日 神戸入港

二十七日 札幌着

△雪

熱帯の高山の雪、それは我々を遙か北方から旅立たしめた原因の一つでもあつた。春の光に山々も石狩の原

野も眩しく輝く様な日、札幌を發ち伊吹山の僅かな残雪を最後に見て一度雪とはお別れを告げた。

そして中央尖山と南湖大山の鞍部から豊富な残雪を輝かせてゐるシルビヤを見るまで、果して雪があるかどうかは確かめる事が出来なかつた。この驚くべき展望を全く期待せずに反対側の斜面を登つて來た私達はこの時はすっかり心を奪はれてしまつた。山脈の西側は全くの快晴、大甲溪の廣い谷を隔てて、いわゆる雪線の景觀さへ見られた。

持參したゾンメルシーを實際に使用事が出来たのは、その翌日、山に入つてから五日目であつた。粉雪の様に汚れない大粒のザラメ雪であつた。スキーを穿いてゐて、下の方に見へる風景は、全く夏であつた。三月には臺灣の北部は未だ雨期である。初め臺北に居た四日間毎日雨、山に入つた日から十日間連續の晴天を得た事は全く奇蹟的であつた。しかし山の上では気温は餘り上昇しなかつた。南湖の頂上、身に感ずる暑さは頭痛を起す程であつたに拘らず気温は僅かに八度を示してゐた事は流石高山を思はせた。この時雪のなくなつた所の土の表面は二十五度になつてゐた。

クマガイ草の咲き誇つてゐる路傍又桃の花のある和かな蕃社より、雪のシルビヤを見る感じ等、忘れられぬ風景であつた。

△蕃人

同行した四人の蕃人は好い山友達だつた。全く寢食を共にして來た。ウグスオツカン 前に小林氏等とこのコースを歩いてゐるので指名した國語がうまくて饒舌な青年。

ペホーウイン おとなしい少年。ダンガオトツパウ 鋭い顔付をしてゐる、何だかむつりしてゐた。シチャカン 實に好い爺さんだつた。ベータボツクのキャンブで我々の爲歓迎の歌を創り歌つて呉れた、淋しい哀調であつた。

警察道路を歩く時は蕃社の女の兒達が荷物を運んで呉れる。彼女等は常に歌を忘れない。シカヨウからマレットまでは随分遠く途中暗くなつてしまつた。覺えたばかりの蕃社の歌と一緒に歌ひながら、夜の霧の中に消えてゐる鐵線橋をランタンで照して行つた事も忘れ難い。

最後に理蕃當局、現地警官諸氏、在臺諸先輩の御厚情に對し深く御禮申し上げます。



### ◇會員通信◇

いよゝ夏山のシーズンも近づいて來ました。今年は是非、會員諸氏より、色々目新しい通信を戴き度いと思ひます。葉書でも何でも結構ですから海岸の丘の事でも、將又そこいらの藪山の事でも、ドシ／＼御送り下さい。

### 巴里から

ロンドンから來た會員田口兄弟と次のやうな山旅をしました。

三月廿四日 巴里發

廿五日 グリンドルワルド着

卅一日迄滞在、スキーを樂しむ

四月一日 グリンドルワルド發ポントレシナ着

二日 デイアブオレツツア、ヒュツテに至る

三日 ビツツ・パリユーに登りポール・ヒュツテに至る

四日 風強くビツツ・ベルニナを斷念、ポントレシナに下る。

五日 ロゼツチタールを溯りコアツ・ヒュツテに泊る

六日 セラ・パスを越え伊太利側のマリネリ小舎に泊る

七日 トレモチア・パスを越え、フエツクスタールをシルス・マリアの村に下る。

八日 セガンティニ美術館を訪れ、午後マローヤ・パスを伊太利に越え、ロカルノに泊る

九日 シンブロンをブリークに抜け、ザース・フエーに至る

十日 午後ブリタニア・ヒュツテに至る

十一日 リムビツシホルンに向ひたるも風、寒氣共に強く頂上に至らず

十二日 アドラー・パスよりシトラールホルンに登りツエルマツトに下る

十三日 ガンデツク・ヒュツテに至る

十四日 ブライトホルンに登る

十五日 ツエルマツトに下り、即日グリンドルワルド歸着

十八日 巴里歸着

山頂を踏むこと僅かに三座、そのいづれも極はめて容易なものばかり、それに今冬のスイスは二月から八週間も碌に雪が降らないとあつて、雪の状態も餘り思はしくありませんでしたが、来る日も／＼快晴で、ベルニナ群衆、ワリスの諸峯はいふまでもなく、オーベルランド、遠くはシヤモニーの連峯まで飽きるほど眺めることが出來ました。ザース・フエーからツエルマツトへの旅は十二年前松方三郎、麻生武治の兩君と行を共にしたといふヘルマン・イムゼンがなる陽氣なガイドを伴ひ、非常に面白い數日を暮らしました。歸つて來た巴里は春暉爛々といった風情ですが、その春に背いて五月はじめマルセイユ發、六月初旬梅雨まへの蒸暑い祖國に戻ります。

四月二十六日

於巴里 藤島敏男

## 穴毛谷の數日

拜啓時下愈々御清適之段奉賀候陳  
者先日少暇を得て穴毛谷に暮營し笠  
ヶ岳に登り候 三月廿九日 飛彈方  
面より入山致候が猪谷船津間はバス  
未だ開通せず、爲めに古川を迂回致  
候同日夕刻 拾見温泉到着 三月卅  
日は荷物を二回に運び穴毛谷一四〇  
〇米 陸測地圖の谷の字の上手笠寄

## 「山日記」募集寫眞の選定

會報七六號にて「山日記」掲載用  
の山岳寫眞を會員中より募集せると  
ころ、約五十點の應募作品あり、左  
の四點を選定す。

北側の富士 東京・早川義郎  
南アルプス連峰(春) 富士劍ヶ峰  
より

大阪・小谷部全助  
鹿島槍(春) 廣島・吉野政造  
ナンド・デヴィ  
東京・立教大學山岳部

に天幕を建て連日の快晴に氣を好く  
して寝に就き候 三月卅一日も朝來  
快晴なりしたため午前五時出發穴毛谷  
を詰め抜戸寄りの二三〇〇米まで登  
りし頃天候崩れ吹雪となりしたため登  
路の偵察 瀧の捲く箇所を見定め退  
却、降雪は夕刻に到りて止みしたため  
新積雪は三寸―五寸。夜に入りて晴  
空に星きらめく。

四月一日快晴 昨日の新雪有之候ひ  
しが雪層薄く粗糲なる舊雪とのなじ  
み充分と見て雪崩は先づ起らざるも

のと思惟し出發、前日と同登路をた  
どり抜戸岳の西肩に午前十一時過ぎ  
着し、それより稜上を傳ひ笠の頂上  
に到りしは十二時五十分に相成候、

山稜には双六方面より來たらしき二  
三日前の二名程の足跡あり笠谷に降  
りし形跡有之候。同日は頻頻の好晴  
なりしも雪崩一つ落ちず全く樂し  
く、のんびりと稜上をさまよひ遊び  
候、三時頃まで稜上に過ごし歸途は

往路を忠實に野營地に戻り申候 四  
月二日は天幕を引掛ひ荷を二回に右  
俣合流點まで運び同所にて土木工事  
の人夫を一名備ひ荷物を負うて貫ひ  
栃尾に出で三時の終發自動車にて歸  
途に就き候 入山當時は戦死者遺骨  
到着にて山間の寒村にも非常の風吹  
き及び候尙又大阪の鐵業家二水氏と  
か笠ヶ嶽の東面一七〇〇米程の斷崖

のテラスに小屋を建設し鉛等の試堀  
を致居候、穴毛本谷詰めの瀧は向て  
右を捲き候同方面の雪崩も三四月の  
頃ともなれば稍や定時性を帯びるら  
しく、判定に若干の推測を下し得る

やに被存候と雖も嚴冬期のそれは殆  
んど豫測を許さざる底の危険且、困  
難なるものと思はれ候、然し同谷の  
支谷は極めて急峻なるため降雪中又  
は直後に於て落ちるべきものの幾十  
%かは此の時に於て落ち盡すやに被  
存此の點、穂高山地方と稍や相通す  
るものある哉に被觀候右難なる觀  
測をも不願御報告申上候 敬具

昭和十三年四月八日

小池 文雄

## 北支より(一)

山東の春は柳の芽に始まり、畑の  
麥の寸を伸ばし、〇〇の爲め〇〇と  
化した部落に點々と梅が咲く、その  
十日ばかりの短い春も、もう過ぎや  
うとしてゐます、夜は未だ早春の肌  
寒を感ずるも、日中の暑氣は七月の  
炎天を思はせます。

ゆるやかな起伏のある高原に道が  
一直線に遙かなる地平線の彼方に消  
え込んでゐます、實に靜かな風景で  
す。

此度は山が見られるかと、樂しみ  
にして來た北支にも、山らしい山も  
なく、僅かにある高原の小隆起は……  
中略……

會員通信にある諸兄の御活躍を讀  
み、僅かに山の氣分を味つてゐま  
す。

北支派遣軍〇〇部隊

岡 本 勝 二

## 北支より(二)

「山岳第三十二年第二號及び、會  
報七十五號、確かに落手致しました  
「山岳」はなか／＼充實したもので讀  
みであります、當分樂しめます。

小生、益々元氣にて〇〇軍など  
をこらしめて居ます。一日も早く〇  
〇や〇〇〇とかいふ奴等を退治し  
て、〇〇山脈や〇〇の上流を我々岳  
人のものにせにやならんと思へば、

自ら軍務にも精の出るものらしいで  
す。

皆様の御健闘を祈る

北支にて

渡 邊 公 平

## 小澤君を送る

山岳會のルームが出来てから間も  
なく小澤君に事務をやつて頂くこと  
になった、指折り數へて見ると、も  
う七年程になる。その間君は熱心に  
ルームを育ててくれたし、會の會計事  
務はキチンとやつて呉れた。今回三  
井に復職して門司の傍系會社に勤務  
することになった。一見思つた事は  
何でもやつて退ける元氣な同君が、

會をやめるに當つてそれを小生に直  
接打明けないで態々某君を介したの  
は少々意外であつた。いろいろ御世  
話になつた揚句、自分の都合で辭め  
るのは申譯のない事でと甚く恐縮し  
てゐられた、小澤君の復職は眞實に  
御目出度いが小澤君に代るよい人を  
探すのは至難のことで困つた、これ

は朝顔や菊を育てゝゐる小生の次男  
に、半日を割いて手傳はせることゝ  
して一先づ鬼がついたが、慣れる迄  
はいろいろ骨が折れる事であらう。

木暮會長と御相談の上小澤さんの  
送別會を開いたのは四月の廿八日  
であつた、其席で同君は會のあとと  
の爲に今迄話さなかつた事を打明け  
て語つた。それは其夜同席された方  
々が聞かれた通りであるが、一例を  
挙げると、山岳に廣告に出しても廣  
告料を仲々支拂はぬ不届者が多い、

それを一々列舉してブラツク、リス  
トを提供してくれた事である、これ  
には聞いてゐる者も皆笑つた、イン  
チキ山の雜誌社では廣告料を請求に  
ゆくと主人が店員の眞似をして「主  
人が歸りましたら申傳へます」と逃  
げる、あとでその店員が主人である  
ことが判つて小澤君は大に憤慨した  
相である、一度で拂はないと二度で  
も三度でも請求にゆく、拂ふまで小  
澤君は熱心に出かける、それでも計  
畫的に支拂金を踏む書店があつた、  
神田でも有名な書店で會の殘本の委  
託をやつた處その帳尻は未だに拂は  
れてゐない、これには流石の小澤君  
手古摺つて私任中の失策ですと云  
つたが、かう云つた不徳義な手合に  
あつては誰れでもうまく出来るもの  
ではない。小澤君はそんな打明話を  
して門司に去つた、此頃來た君から  
の私信の一節に

毎日大した事もなく例によつて銀  
座の夜店の鼠が車を廻して居る様  
なものにて毎日同じ事を繰返して  
居り候赴任の際は「蛇穴を出て天  
下の志」と云つた氣持もありまし  
たが「いづくも同じ秋の夕暮」と  
は千古の名言とも感じ入り申候  
とある、遙に虎の門のルームに思を  
寄せてその七ヶ年の出來事を追懷し  
てゐる事だらう、會員諸君と共に同  
君の健在を祈る

鳥山 梯 成

× × ×





## 會務報告

### 六月定例理事會並役員總會

六月九日 於虎門本會事務所

出席者

木暮、武田、島山、黒田、西堀、

島田、高橋、吉澤、野口、加藤、中

司、

(委任)

近藤、加賀、今西、今村、辻本、

茨木、高野、榎谷、横、早川、中村

田部、小島

一、副會長の件

副會長は黒田孝雄氏を全會一致を

以て推選、決定す。

一、山日記の件

六月十八日發行の豫定、新項目軍

機保護法の施行と撮影等の注意、及

び寫眞四葉

一、山岳第三十三年一號の件

決定原稿左の通り

○ナンダコート日記(裝備其の

他)(濱野)

○山岳語彙集中間報告(高橋)

○ヒマラヤへの途(江上)

○題未定(望月)

一、小集會の件

後藤朝太郎氏に依頼

題「支那と日本の山」

七月初旬於商工俱樂部

一、新入會員詮衡の件

一、厚生協會評議員追加の件

加藤理事に依頼と決定

### 關西支部便り

#### 來室者報告

| 月別  | 會員 | 會員外 | 議 會 |    | 計   |
|-----|----|-----|-----|----|-----|
|     |    |     | 回数  | 人員 |     |
| 3 月 | 41 | 37  | 2   | 28 | 106 |
| 4 月 | 42 | 39  | 1   | 13 | 94  |

集會利用登山團體は學聯OBの一  
回なり。

#### 第八十三回小集會

三月七日 於大阪堂ビル清交社

本年最初の小集會は時節柄最近北  
支の旅より歸國された黒田正夫氏を

迎へて開催次の講演あり

冬のチャハル、緩遠について

會員 黒田 正夫氏

北支に於ける「雪」の種々なる狀

況調査に赴かれた氏より先づ旅行の  
目的、ついで北支の山岳に關し地理  
學的な説明あつて、氏自身撮影に  
かゝる貴重なフィルムを公開、北支  
山岳の大觀及異風景を紹介の上、一  
詳しく解説され事變下の我々國民と  
して又山岳人として大いに得る處が  
あつた。唯も一つ、こんなお話を  
聞きたいといふ感はせぬでもなかつ  
たが色々制限があるやうなので仕方  
なかつた。それにしても十二月に引  
續きヒマラヤ、蒙古、北支の話がき  
けた事は連關性からいつても又アジ  
アの山岳地帯への關心を深める點か  
らいつても甚だ好都合であつた。

續いて塚本氏のスキー映畫「藏王」  
及鐵道省作白魔征服の映寫あり盛會  
裡に十時閉會した。(富田記)

出席者左の通り

西岡一雄、藤木九三、宮崎武夫

津田周二、榎谷徹藏、玉置七郎

今西錦司、中原繁之助、富田健一

以上晚餐會及講演會出席、

金谷簡二、前田光雄、山村 功

下川友記、阿江正造、今西壽雄

西井常造、鈴木克英、辻谷幾藏

柏岡英男、杉本俊二、大中彰一

法貴六衛、笹谷良造、

會員外三十六名(以上講演會出席)

會費の御拂込みを願ひます

## 新着圖書

- 登山とスキー 五月號 其社  
 ツーリスト 同 J・T・B  
 寫眞月報 同 小西六本店  
 山小屋 同 朋文堂  
 稜線 第二號 下關山岳會  
 廣島山岳會 第八五號 同會  
 地學雜誌 四、五月號 地學協會  
 橫濱山岳會 第九九號 同會  
 東京市山岳部報 第五七號 同部  
 Vorwarts 三冊 東鐵山男の會  
 Rivista Mensile, C. A. I.,  
 The Prairie Club, April 1938.  
 De Bergids //  
 Die Alpen //  
 The Journal of the Mountain Club,  
 S Africa No. 40, '37  
 部報 中島山岳部  
 會報 魚市場山岳會  
 LA MONTAGNE No. 297, 1938.  
 THE GEOGRAPHICAL  
 JOURNAL, AP. 1938.  
 甲山峽水 春季號 山梨縣景勝協會  
 CENTRO ALPINISTICO  
 ITALIANO 1938 XVI  
 DE BERGIDS MEI 1938  
 THE ALPIN JOURNAL,  
 MAY 1938 No. 256  
 雪線社報告 雪線社  
 會員寄贈圖書  
 岸田、笹谷共著  
 吉野群山(紀行と隨筆)  
 以上 笹谷良造氏

## ◇「山岳」合本用ケース

山岳第三十二年合本用ケースが出来ました。希望の方は事務室まで御申込願ひます。  
 體裁上質バツクリム。春、山岳第何年、西曆を押す、ピラは兩面に會章を押す。前後見返し英木畫伯筆。定價合本用ケースのみ所用の場合、五十錢(送料本會負擔)。雜誌を本會へ送付され製本料共一圓(返送料本會負擔)

## 御知らせ

一、高島屋で開かれる日本山岳畫協会の展覽會は、一日延長即ち七月六日より十一日迄、となりました。  
 二、山岳三十二年二號に誤丁がありました、讀む順序は通し頁で左の如くなります。

398-401-402-399-400

昭和十三年六月十五日印刷  
 昭和十三年六月十六日發行

發行兼編輯者 吉澤一郎

發行所 東京市芝區平町(不二屋ビル) 日本山岳會

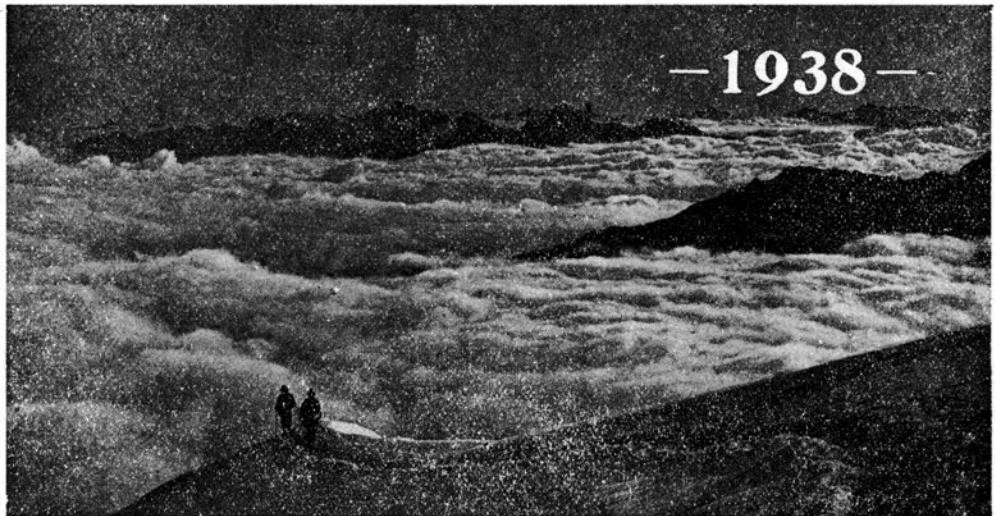
電話(四五)一六四九 振替東京四八二九

印刷者 植田庄助 印刷所 成文堂印刷所

## 山日記

編會岳山本日

—1938—



昭和十三年の登山季節を控へ、待望の『山日記』一九三八年版は既に編輯を了し、六月中旬を以て愈々發賣の豫定である。初刊以來茲に九星霜、昨年版の刊行に當つては内容並に體裁に涉り全般的に劃期的更新を行ひ、使用者の利便に應じて好評を博したが、本年版は更にその效用を擴充すべく、苦心蒐集せる新資料によつて、特に登山日程表、山小屋、山案内、全國登山團體一覽、本邦山岳語彙、郵便規定の各項に追加改訂を施し、その正確を期すると共に本邦唯一の『山日記』たる風價の發揚に努めてゐる。本日記が登山家必携の寶典たるは云ふまでもなく、國民體位向上の特に強調せられる時、願くばシーズンの活躍を計畫してこの新版の出來を待たれよ。

¥ 1.20

菊牛裁判四四〇頁  
 挿入地圖十三  
 レザークロス装

大島亮吉著

山一研究と隨想

定價三・〇〇 送料三三

志賀重昂著

日本風景論

價四〇 送料六

板倉勝忠著

自然美と其驚異

價四〇 送料六

矢野龍渓著

アルプスの氷河

價各四〇 送料六

浦松佐美太郎著

アルプス登攀記

價各四〇 送料六

庫文波岩

店書波岩

東京 神田 橋本 二六四〇